

リンパ腫に関しては、本邦における病理分類や治療法のコンセンサスが形成される重要な学会です。本総会におけるシンポジウムでは「Current and Future Management of B-Cell Lymphoma Based on Molecular Biology」、「免疫系の制御によるがん治療の進歩」、「T細胞性リンパ腫のUP TO DATE」の三テーマが討論され、第一線で活躍中のシンポジスト十一名が登壇しました。熊本大学からは血液

内科学の松岡雅雄教授と奥野豊准教授、免疫識別学の千住寛准教授にご登壇いただきました。また、若手を対象とした教育シンポジウム「WHO2016 - the updated version 4 - 病理と臨床からのメッセージ」を実施し、悪性リンパ腫に関する最新のコンセンサス形成の一助といたしました。同時開催の第二十六回日本樹状細胞研究会（千住寛会長）との合同特別講演では、発生医学研究所の中尾光喜教授に「エピジェネティクスと現代人の体質学」のタイトルでご講演をいただきました。熊本地震による日程変更にもかかわらず、全国から悪性リンパ腫の診断や治療に携わる医師、網内系・リンパ組織・造血組織等に関する研究者、悪性リンパ腫をはじめとするリンパ網内系疾患に関連する製薬企業関係者など約三八〇名の参加があり、活発な討論が繰り広げられました。

最後に、本総会開催にあたり、多大なご支援をいただきました公益財団法人

肥後医育振興会に心より感謝申し上げます。なお、本総会の会場費の一部を熊本地震災義援金として熊本県にご寄付させていただきました。

第十七回日本早期認知症学会 学術大会の報告

医療法人暁清会小林脳神経外科
理事長・院長 小林 清市

平成二十八年九月十七日（土）～十八日（日）鶴屋ホール、くまもと県民交流館パレアにて開催致しました。お蔭さまで参加登録者数は五〇〇名を超え、盛會裡に終えることが出来ました。肥後医育振興会様とは、第二日目の市民公開講座「認知症く上手な予防、上手な治療」と題して共同開催していただき、厚く御礼申し上げます。萩市金谷天満宮の陽（みなみ）信孝宮司の感動的なお話に三五〇名の満員の聴衆の涙を誘っていました。

本大会では「認知症の予防、早期発見・早期対応くそして医療と介護の調和を目指してく」をテーマとして、ご高名な講師陣による特別講演、文化講演、さまざまな切り口からのシンポジウム、ラントンセミナー、モニングセミナー、一般演題、そして市民公開講座と時宜を得た実践的な素晴らしい内容でした。プログラムから三つのシンポジウムの要旨を簡潔にご報告したいと考えます。

シンポジウム1 「認知症の予防はどこまで可能か？」

MCI（軽度認知障害）と診断された週刊朝日編集委員の山本朋史氏は認知症早期治療の実体から生活習慣の改善と前向きな思考が大事と話された。

九州大学の吉田大悟先生は六十五歳以上の全高齢者を対象にした久山町疫学調査では二〇〇〇年代に入ってアルツハイマー病の有病率が人口の高齢化を超して上昇しており、このことは高血圧の管理はもとより急増する糖代謝異常の予防・管理の重要性と禁煙、食習慣の重要性に国民全体が強く認識を共有することの大切さを報告された。

福岡大学の田中宏暁先生からは、人類は走るように進化して来た。意識的に歩く速度での slow jogging が脳機能を高め、認知症の予防の可能性を示された。

東京医科歯科大学の朝田隆先生はMCIく認知症と診断された人々が前向きに人生を生きていくことはある意味で至難の技であると前置きされたあと、MCIがあっても前向きに生き、障害を進行させないよう努力する先輩と同じ境遇にある仲間の集う場の大切さを強調され、当事者に「希望」をもってもらえるよう後押ししてくれる支援者の重要性を述べられた。

シンポジウム2 「認知症医療の問題点く多職種間に横たわる問題点」

認知症医療の現場で起こっている意見

の隔たりは、職種が異なるからでなく、認知症の人に「何もわからない人」という偏見で接するのかが、当事者の意見にしっかりと耳を傾け尊厳をもって接するのかがという価値観の違いで起こってくる。

認知症の人は私たちが思う以上に私たちのことを理解している。多職種間に加えて認知症当事者と一緒にケアを考え実践することが質の高いケアにつながると結論づけた。

シンポジウム3 「Treatable dementiaの再考」
神経内科領域から、大分大学木村成志先生、杏林大学平野照之先生により、脳血管障害と認知症の共有する危険因子について最新の知識をお話された。

脳神経外科領域からは、厚地脳神経外科病院 厚地正道先生が、特発性正常圧水頭症の「DESH」、「CAPPAH sign」などの特徴的な画像診断と「歩行障害」、「認知症」、「尿失禁」の三徴候に早く気付いて難易度の低い水頭症手術をきつちり行うことが出来れば、診療に取り組みやすい疾患ではあると話された。

熊本大学山田和慶先生からは、脳深部刺激療法（DBS）の登場によって機能神経外科治療の様相が変わったこと、認知症に対する超音波集束装置による治療介入は認知症治療の一つの選択肢になる可能性を示唆された。

肥後医育振興会様の今後の更なるご発展を祈念し擲筆致します。